

注 意 事 項

1 試験開始時刻 14時20分

2 試験種別終了時刻

試験科目	科目数	終了時刻
「電気通信システム」のみ	1科目	15時40分
「専門的能力」のみ	1科目	16時00分
「専門的能力」及び「電気通信システム」	2科目	17時20分

3 試験種別と試験科目別の問題(解答)数及び試験問題ページ

試験種別	試験科目	申請した専門分野	問題(解答)数					試験問題ページ
			第1問	第2問	第3問	第4問	第5問	
線路主任技術者	専門的能力	通信線路	8	8	8	8	8	線1~線15
		通信土木	8	8	8	8	8	線16~線26
		水底線路	8	8	8	8	8	線27~線40
	電気通信システム	専門分野にかかわらず共通	問1から問20まで			20	線41~線44	

4 受験番号等の記入とマークの仕方

- マークシート(解答用紙)にあなたの受験番号、生年月日及び氏名をそれぞれ該当枠に記入してください。
- 受験番号及び生年月日に該当する箇所を、それぞれマークしてください。
- 生年月日の欄は、年号をマークし、生年月日に1けたの数字がある場合、十の位のけたの「0」もマークしてください。

[記入例] 受験番号 01CF941234

生年月日 昭和50年3月1日

受 験 番 号									
0	1	C	F	9	4	1	2	3	4
●	○	A	A	0	0	0	0	0	0
1	●	B	B	1	1	●	1	1	1
	2	●	C	2	2	2	●	2	2
	3		D	3	3	3	3	●	3
	4		E	4	●	4	4	4	●
	5	●	5	5	5	5	5	5	5
	6		G	6	6	6	6	6	6
	7		H	7	7	7	7	7	7
	8		8	8	8	8	8	8	8
	9	●	9	9	9	9	9	9	9

生 年 月 日									
年 号		5	0	0	3	0	1		
平成	(H)	0	●	0	●	0	●	0	●
		1	1	1	1	1	1	1	●
昭和		2	2		2	2	2	2	
	●	3	3		●	3	3		
大正	(T)	4	4		4		4		
		5	5		5	5	5	5	
	6	6		6	6	6	6		
	7	7		7	7	7	7		
	8	8		8	8	8	8		
	9	9		9	9	9	9		

5 答案作成上の注意

- マークシート(解答用紙)は1枚です。2科目の解答ができます。
「専門的能力」は薄紫色(左欄)、「電気通信システム」は青色(右欄)です。
- 解答は受験する試験科目の解答欄の正解として選んだ番号マーク枠を、黒の鉛筆(HB又はB)で濃く塗りつぶしてください。
ボールペン、万年筆などでマークした場合、採点されませんので、使用しないでください。
一つの問いに対する解答は一つだけです。二つ以上マークした場合、その問いについては採点されません。
マークを訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
- 免除科目がある場合は、その科目欄は記入しないでください。
- 受験種別欄は、あなたが受験申請した線路主任技術者(『線 路』と略記)を で囲んでください。
- 専門的能力欄は、『通信線路・通信土木・水底線路』のうち、あなたが受験申請した専門的能力を で囲んでください。

6 合格点及び問題に対する配点

- 各科目の満点は100点で、合格点は60点以上です。
- 各問題の配点は、設問文の末尾に記載してあります。

マークシート(解答用紙)は、絶対に折り曲げたり、汚したりしないでください。

次ページ以降は試験問題です。試験開始の合図があるまで、開かないでください。

受験番号 (控え)									
--------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(今後の問い合わせなどに必要になります。)

試験種別	試験科目	専門分野
線路主任技術者	専門的能力	通信土木

問1 次の問いに答えよ。

(小計20点)

- (1) 次の文章は、土の基本的性質について述べたものである。□内の(ア)~(エ)に最も適したものを、下記の解答群から選び、その番号を記せ。ただし、土粒子、間隙水及び間隙空気の体積をそれぞれ V_s 、 V_w 及び V_a とし、また、これらの重量をそれぞれ W_s 、 W_w 及び W_a とする。

(2点×4=8点)

土は、一般的に、固相である土粒子、液相である間隙水^{げき}、気相である間隙空気の3相から成り、土の基本的性質は、間隙比、間隙率、飽和度などで表される。土の密度を表す間隙比 e は、 $e = \square$ (ア)で表され、もう一つの指標である間隙率 n は、 $n = \square$ (イ)で表される。軟岩、砂質土、粘性土及び有機質土を比較すると、一般的に、間隙比が最も大きい値となるものは、□(ウ)である。

また、土の間隙の体積と間隙内の水の体積の割合を示す飽和度 S_r は、 $S_r = \square$ (エ)で表される。

<(ア)~(エ)の解答群>

粘性土	軟岩	砂質土	有機質土
$\frac{V_w + V_a}{V_s}$	$\frac{V_a}{V_s}$	$\frac{V_w}{V_a}$	$\frac{V_w}{V_w + V_a}$
$\frac{W_s}{W_w + W_a}$	$\frac{W_a}{W_s}$	$\frac{W_w + W_a}{W_s}$	$\frac{W_w}{W_w + W_a}$
$\frac{V_w + V_a}{V_s + V_w + V_a}$		$\frac{V_a}{V_s + V_w + V_a}$	
$\frac{W_w + W_a}{W_s + W_w + W_a}$		$\frac{W_a}{W_s + W_w + W_a}$	

- (2) 次の文章は、土中の水とその流れについて述べたものである。□内の(オ)~(ク)に適したものを、下記のそれぞれの解答群から選び、その番号を記せ。(3点×4=12点)

- () 地下水について述べた次の文章のうち、誤っているものは、□(オ)である。

<(オ)の解答群>

被圧地下水は、その上限及び下限に不透水性の地層が境界となって存在し、地下水水面を持たず、一般に、大気圧以上の圧力を有する。

地下水は、地下水水面より下に存在する土中の水をいう。また、地下水水面以下の土の間隙は、通常、水で飽和されている。

地下水位は、ボーリング孔や鉄管、塩ビ管の打ち込みによる孔を利用して、触針フロート等を持つ水位測定器を用いて求める。

沖積層における地下水位は、約10年のサイクルで上下動を繰り返す。

() 透水係数について述べた次の文章のうち、誤っているものは、(カ) である。

<(カ)の解答群>

土中を流れる間隙水の流速は、流れが速くて乱流を生ずるような場合を除けば、ダルシーの法則に従い、動水勾配に比例する。

透水係数は、土を構成する土粒子の大きさや土の締めり方によって定まり、無次元量である。

透水性の高い砂質土の透水係数は、円筒容器に土を詰めてその両端に一定の水頭差を与えて透水量を測る定水位透水試験によって求める。

粘土の透水係数は、圧密試験結果の圧密係数と体積圧縮係数を用いて求めることができる。

() 流線網について述べた次のA～Cの文章は、(キ) 。

A 流線網は、土中の二次元浸透流の状態を流線と等ポテンシャル線との二組の曲線群で網目状に表したものである。

B 流線網を利用することにより、浸透水量や流速、土中の任意の点における水頭を求めることができる。

C 流線は、水分子がたどる軌跡であり、等ポテンシャル線は、水頭が等しい点を結んだものである。異方性透水地盤では、流線と等ポテンシャル線とは直交する性質がある。

<(キ)の解答群>

Aのみ正しい	Bのみ正しい	Cのみ正しい
A、Bが正しい	A、Cが正しい	B、Cが正しい
A、B、Cいずれも正しい	A、B、Cいずれも正しくない	

() 土と水の相互作用について述べた次のA～Cの文章は、(ク) 。

A 浸水沈下は、飽和状態にある地盤の水が地下水面の下降により流出して不飽和状態となり、見かけの粘着力が消失し強度が低下したり、土粒子が間隙中を落下して地盤が沈下する現象である。

B クイックサンドは、間隙中を上昇する水の浸透力によって、砂がその粒子間力を失い、懸濁液のような状態になることである。

C 凍上は、気温0〔 〕以下が長時間継続すると、地表面近傍の土中水が凍結するが、見かけ上含水比が低下してサクションが増大し、その結果、下層から土中水が吸引され、これが上昇して凍結する。この繰り返しによって地盤が膨れ上がることである。

<(ク)の解答群>

Aのみ正しい	Bのみ正しい	Cのみ正しい
A、Bが正しい	A、Cが正しい	B、Cが正しい
A、B、Cいずれも正しい	A、B、Cいずれも正しくない	

- (1) 次の文章は、通信土木設備の耐震対策などについて述べたものである。□内の(ア)~(エ)に最も適したものを、下記の解答群から選び、その番号を記せ。ただし、□内の同じ記号は、同じ解答を示す。(2点×4=8点)

通信土木設備は、様々な構造形式が開発、適用されてきた。これらは水平方向あるいは鉛直方向に埋設された地下構造物となり、地盤の運動に追従して変形する構造物である。

一般管路設備では、ルートを通ずる地盤条件によって管種と継手の適用を変えるが、管の材質や継手の性能は、防災設計の手順などに従って耐震性を考慮したものが開発されている。

□(ア)は、マンホール部に設置するもので、管路とマンホールの相対運動を□(イ)構造で吸収する構造になっている。また、管路相互を接続する一般継手については、□(ウ)継手が導入され地震時の管の□(イ)運動に抵抗できる強度を有している。

とう道設備は、地中深くに構築され、剛性が高いことから災害に強い構造形式であるが、一般的に耐震対策として、兵庫県南部地震の経験を踏まえ、開削とう道と立坑の接合部には、□(エ)を設置している。

<(ア)~(エ)の解答群>

離脱	差込	カラー
クッション	印ろう型	ソケット
スクリュー型	ねじ	パッキング
ダクトスリーブ	ダクトソケット	伸縮
弾性ワッシャー	スリーブ	可とう継手

(2) 次の文章は、単純ばりの支点反力などを求める手順について述べたものである。□内の(オ)~(ク)に最も適したものを、下記の解答群から選び、その番号を記せ。

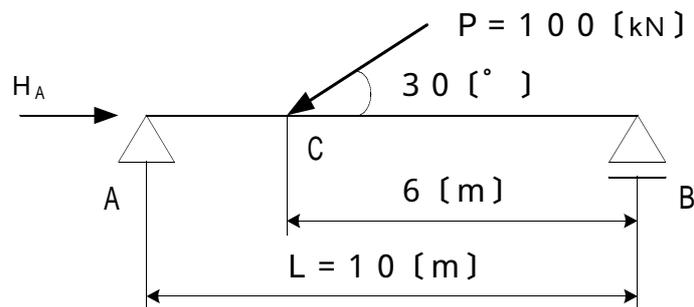
(3点×4 = 12点)

図のように30度の角度で集中荷重： $P = 100$ [kN]が作用する長さ： $L = 10$ [m]の単純ばりがある。

水平方向の反力は、 $H_A =$ □(オ) [kN]となり、A点におけるせん断力は $S_A =$ □(カ) [kN]となる。

また、このはりに発生する最大曲げモーメントの位置は、A点から □(キ) [m]で、その大きさは □(ク) [kN・m]である。

なお、 $\sin 30^\circ = 0.500$ 、 $\cos 30^\circ = 0.866$ 、 $\tan 30^\circ = 0.577$ とする。



<(オ)~(ク)の解答群>

0	4	5	10
12	20	30	40
50	57.7	60	86.6
100	120	150	1,200

- (1) 次の文章は、マンホール内作業における作業手順について述べたものである。□内の(ア)~(エ)に最も適したものを、下記の解答群から選び、その番号を記せ。(2点×4=8点)

マンホール内で作業を行う場合には、最初にマンホールなどの周囲に保安施設を設置し、交通に対して危険がある場合は、ガードマンを配置する必要がある。マンホール内部には、有害ガスなどが貯留しているおそれがあるので、入溝前には必ず換気を実施する。その際の風かん(管)は、断面を円形に保つようにするとともに、風かんの先端部を□(ア)の位置にして、換気が効果的に行われるようにする。

□(イ)により求められる所要換気時間が経過したら、酸欠・有害ガス検知器を用いて危険がないか確認を行う。一般的に、マンホール内に貯留する有害ガスの種類としては、一酸化炭素、メタンガス、□(ウ)が挙げられる。測定は、垂直方向、及び水平方向の必要な箇所をそれぞれ3点以上測定し、測定結果の記録と安全衛生管理上の資料として、□(エ)の記録保存を行う。

<(ア)~(エ)の解答群>		
マンホール高さ中央部	地下水位	アンモニア
6か月	土被り	土質種別
マンホールの大きさ	マンホール天井部	硫化水素ガス
アセチレンガス	二酸化炭素	3年間
マンホール底部近く	3か月	1年間

- (2) 次の文章は、通信土木設備の劣化と対策などについて述べたものである。□内の(オ)~(ク)に適したものを、下記のそれぞれの解答群から選び、その番号を記せ。

(3点×4=12点)

- () マンホールの劣化などについて述べた次のA~Cの文章は、□(オ)。

- A 鉄やマンガンの酸化物や水酸化物が、マンホールの壁に付着して黒く変色している現象を放置すると、化学反応により硫化水素を発生させ、コンクリートを劣化させることがある。
- B 現場打ちのマンホールにおいて、施工不良等で鉄筋かぶり小さい箇所があると、コンクリートのアルカリ骨材反応が進行して鉄筋腐食を生じ、壁がはがれ落ちる。
- C コンクリート中の鋼材の腐食が、塩化物イオンにより促進され、コンクリートのひび割れやはく離、鋼材の断面減少を引き起こす劣化現象は、塩害といわれる。

<(オ)の解答群>		
Aのみ正しい	Bのみ正しい	Cのみ正しい
A、Bが正しい	A、Cが正しい	B、Cが正しい
A、B、Cいずれも正しい	A、B、Cいずれも正しくない	

- () ケーブル引き上げ管の劣化に対する対策等について述べた次の文章のうち、誤っているものは、である。

<(カ)の解答群>

鋼管に穴があく、など著しい劣化が生じた場合は、一般に、ケーブルの接続替えを伴わない半割り管を用いて取替えを行う。

半割り管は、温泉地などの強腐食性地帯でも十分な耐食性が得られるように溶融亜鉛メッキの上に有機ライニングを行った二重の防食処理が施されている。

車両の通行の少ない箇所においては、経費節減のために塩化ビニル製の半割り管を用いる。

部分的な劣化であれば、パテを既設管に塗布し、ステンレス板とガラスクロス巻いて最後に錆浸透型塗料を塗布するオーバークリート工法が適用できる。

- () マンホール内の金物の劣化について述べた次のA～Cの文章は、。

A 異種金属が接合されている箇所の腐食は、マグネシウムなどの流電陽極を用いた犠牲防食が有効である。

B 塩化物イオンを多く含む溜まり水が濃縮して酸性環境となり、これにより局部的に腐食がおこるすきま腐食が原因で、スタンダードクロージャのスリーブバンドが破断することがある。

C 硫酸イオンを多く含む貯留水中で、バクテリアの作用により腐食が著しく発生するケースはバクテリア腐食といわれる。

<(キ)の解答群>

Aのみ正しい Bのみ正しい Cのみ正しい

A、Bが正しい A、Cが正しい B、Cが正しい

A、B、Cいずれも正しい A、B、Cいずれも正しくない

- () 橋梁添架管路の腐食、補修対策などについて述べた次のA～Cの文章は、。

A 塗装の耐久性は、素地調整(ケレン)の度合い、塗り重ね回数、塗料の種類により左右される。

B フッ素樹脂系の塗料は、塗料単独の性能で比較すると耐久性が高いが、塗り替え時には3種ケレンでないとその性能が十分に発揮できないため、選定、適用には注意を要する。

C 工業地帯や塩害地域、多湿環境などにおいて、通常の商品では耐久性に問題がある場合は、粉体塗装による高性能な防食仕様物品に取り替える方法がある。

<(ク)の解答群>

Aのみ正しい Bのみ正しい Cのみ正しい

A、Bが正しい A、Cが正しい B、Cが正しい

A、B、Cいずれも正しい A、B、Cいずれも正しくない

- (1) 次の文章は、地下構造物内における換気の概要について述べたものである。□内の(ア)~(エ)に最も適したものを、下記の解答群から選び、その番号を記せ。ただし、□内の同じ記号は、同じ解答を示す。(2点×4=8点)

酸素欠乏症等防止規則では、当該作業を行う場所の空気中の酸素の濃度を18(%)以上に保つように換気をしなければならないと定めている。

換気を必要とする地下構造物としてはマンホール、とう道などがある。

マンホールについては可搬型のマンホール換気扇を使用する。また、とう道の場合には自然換気方式と□(ア)換気方式とがある。

□(ア)換気方式には、横流式換気、半横流式換気及び□(イ)換気等がある。

□(イ)換気は一方の立坑に□(ウ)を設置し、反対側立坑に排気ファン等を設置し、とう道そのものを□(エ)として換気する方式である。

<(ア)~(エ)の解答群>

トンネル	循環	ダクト	センサ
垂直式	強制	ピット	自由
対流式	双方向	送気ファン	縦流式
ガラリ			

- (2) 次の文章は、とう道設備の点検、補修、継手及び非破壊探査などについて述べたものである。□内の(オ)、(カ)に適したものを、下記のそれぞれの解答群から選び、その番号を記せ。(3点×2=6点)

- () とう道の点検、補修について述べた次の文章のうち、誤っているものは、□(オ)である。

<(オ)の解答群>

とう道の補修、補強は点検、診断結果に基づいて実施する。とう道の点検には、日常点検及び定期点検並びに特別点検がある。このうち日常点検は、埋設物環境監視のための巡回点検、不良施設把握及び予防保全のための巡回点検などがある。

点検、診断により発見された不良箇所は、その不良の内容、程度により、設備の取替えなど応急処理で対処するものと、計画的に修理、改善するものがある。

コンクリートのひび割れや打継ぎ目等からとう道内に流入する地下水が、各種設備の劣化を早めているため、漏水問題がとう道の保守上、重要な要因となっている。とう道の漏水補修は、ひび割れ部分に沿ってV字形にはつり、モルタル充填する方法が古くから使われてきたが、近年、様々な材質の充填、注入剤が商品化されており、現場の漏水量に応じた適切な工法が採用されている。

開削とう道で、腐食した鉄筋が露出している場合の補修方法は、腐食鉄筋の上から直にかぶりコンクリートを打設するのが一般的である。

() 非破壊探査及び継手などについて述べた次のA～Cの文章は、。

- A シールドトンネルクラウン部等の二次覆工コンクリートに生じた空洞の非破壊探査には、パルスレーダーによるものがある。
- B とう道設備は、災害に強い構造形式であるが、とう道への浸水については、この影響がビルに及ばぬよう、防水壁を設置する場合がある。
- C とう道本体の著しい段差は、とう道と建物との接続箇所が発生する場合がある。これらの原因の大半は、地盤の凍上によるものである。

<(カ)の解答群>

- | | | |
|--------------|----------------|---------|
| Aのみ正しい | Bのみ正しい | Cのみ正しい |
| A、Bが正しい | A、Cが正しい | B、Cが正しい |
| A、B、Cいずれも正しい | A、B、Cいずれも正しくない | |

(3) 次の文章は、通信土木設備の近接工事からの設備防護、近接施工対策などについて述べたものである。内の(キ)、(ク)に適したものを、下記のそれぞれの解答群から選び、その番号を記せ。(3点×2=6点)

() 現場立会について述べた次の文章のうち、誤っているものは、である。

<(キ)の解答群>

近接工事による設備故障の主な原因は、無連絡、無立会、無指示であり、社外工事情報を把握することが重要なポイントである。

設備に近接して工事が実施される場合に、法令等で現場立会が義務付けられていないため、立会要請のない工事が跡を絶たない。

工事情報収集を制度化した例の一つに埋設物確認制度がある。これは道路管理者又は警察に対し、許可申請書(道路占用又は道路使用)に埋設物企業者の埋設物確認調書の添付を許可条件として認めてもらう制度である。

事前協議では、近接工事による通信土木設備への影響の有無、立会・防護の必要性を双方で確認するとともに、今後の立会計画を作成する。近接工事の計画から施工までの段階により、設計時の事前協議と施工時の現場立会がある。

() 近接施工対策について述べた次の文章は、。

- A とう道の近接施工においては、その影響を定量化し、防護の必要性を検討するために、土質条件を決定し周辺地盤、とう道変位を予測する影響解析を実施する。
- B 通信土木設備への悪影響が想定される場合には、適切な防護対策を近接工事実施者と協議して実施する。防護対策には、社外工事側の施工方法による防護対策と、通信土木設備側での防護補強がある。
- C とう道の一般的な計測項目は、沈下量(沈下計、レベル等で計測)、傾斜量(傾斜計、トランシット等で計測)、内空変位量(変位計、パイプスケール等で計測)である。

<(ク)の解答群>

- | | | |
|--------------|----------------|---------|
| Aのみ正しい | Bのみ正しい | Cのみ正しい |
| A、Bが正しい | A、Cが正しい | B、Cが正しい |
| A、B、Cいずれも正しい | A、B、Cいずれも正しくない | |

問5 次の問いに答えよ。

(小計20点)

(1) 次の文章は、コンクリート構造物の非破壊検査方法の概要について述べたものである。

内の(ア)~(エ)に最も適したものを、下記の解答群から選び、その番号を記せ。ただし、 内の同じ記号は、同じ解答を示す。(2点×4=8点)

コンクリート構造物の非破壊検査は、構造物の調べたい性質を直接調べず、関連する性質を測定してその結果から換算、推定するものである。コンクリートの圧縮強度を推定する方法には、 や超音波速度法等がある。 は、テストハンマーを用いてコンクリート表面を打撃した時の重錘のはね返り量からコンクリート強度を推定する方法である。また鉄筋位置、かぶり厚さを探査する方法には放射線法、電磁波法、 がある。このうち鉄筋探査に最も一般的に用いられている方法は である。 は、プローブに付けたコイルに交流電流を流すと、時間的に変化する磁束がコイルを貫いて発生し、単位時間当たりの磁束の変化量に比例した起電力がコイルに生ずることを利用したものである。

コンクリートのひび割れ、剥離、^{はく}空洞を調査する方法には、コンクリート表面に設置した発振子や衝撃入力装置によって内部に を発生させ、これをコンクリート表面に設置した受振子で測定する 法がある。

法は、その利用周波数範囲や受信方法等によっていくつかの方法に分類されるが、20[kHz]以上の周波数帯を使用する方法は、 といわれる。

<(ア)~(エ)の解答群>

- | | | | |
|-------|----------|--------|-------|
| 打音法 | 超音波法 | 振動法 | コア強度法 |
| 自然電位法 | 赤外線法 | プルアウト法 | 弾性波 |
| 電磁誘導法 | A E 法 | 反発硬度法 | 電気抵抗法 |
| プルオフ法 | UVスペクトル法 | | 分極抵抗法 |
| ドリル法 | | | |

(2) 次の文章は、標準貫入試験について述べたものである。□内の(オ)～(ク)に適したものを、下記のそれぞれの解答群から選び、その番号を記せ。(3点×4=12点)

() 標準貫入試験の方法などについて述べた次の文章のうち、正しいものは、□(オ)である。

<(オ)の解答群>

標準貫入試験で用いられるハンマーは、質量65.3(kg)である。

ハンマーは、72(cm)の高さから自由落下させる。

N値は、ロッド先端に取り付けたサンプラーを地盤に35(cm)貫入させるのに必要な落下回数である。

標準貫入試験では、強度の指標N値とともに、乱した試料を採取することができるので、土質分類、各土層の層厚、地下水位などの情報も得られる。

() 標準貫入試験の特徴について述べた次の文章のうち、誤っているものは、□(カ)である。

<(カ)の解答群>

多くの国で試験法が基準化されており、結果の評価、利用、対比が容易である。

過去のデータの蓄積が多く、少ない費用で広範囲の値が得られる。

コーンブリー法などでの試験では、操作する人により結果が変化することが少なく偏差が小さい。

試験結果の利用法が各種基準類で確立している。

() 標準貫入試験結果の適用について述べた次のA～Cの文章は、□(キ)。

- A N値から他の強度・変形特性を推定する式が提案されている。砂質土の内部摩擦角〔°〕は、道路橋示方書では、 $\phi = 15 + \sqrt{15N - 45}$ 〔°〕(ただしN > 5)、Peckによれば、 $\phi = 0.3N + 2.7$ 、大崎によれば、 $\phi = 15 + \sqrt{20N}$ など各種提案されている。
- B 粘性土の一軸圧縮強度 q_u 〔kN/m²〕は、 $q_u = (2.5 \sim 5.0)N$ (ただし、N > 4)のような比例の関係があることが分かっている。
- C 開削トンネルの設計において土被り荷重は、N値 < 5であれば、1.6～1.8〔kN/m³〕、N値 > 6であれば、2.0〔kN/m³〕としている。

<(キ)の解答群>

Aのみ正しい

Bのみ正しい

Cのみ正しい

A、Bが正しい

A、Cが正しい

B、Cが正しい

A、B、Cいずれも正しい

A、B、Cいずれも正しくない

() 標準貫入試験の短所について述べた次のA～Cの文章は、(ク)。

- A ボーリングマシンによる調査と比較した場合は、試験装置が高額となり、費用が高い。
- B 試験結果にごまかしがないか、などの確認方法がない。
- C 乱さない資料の採取を行う場合に、特殊な樹脂の注入が必要となり作業性が落ちる。

<(ク)の解答群>

- | | | |
|--------------|----------------|---------|
| Aのみ正しい | Bのみ正しい | Cのみ正しい |
| A、Bが正しい | A、Cが正しい | B、Cが正しい |
| A、B、Cいずれも正しい | A、B、Cいずれも正しくない | |